慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日露戦争の記憶の"敗戦後"史：横須賀・ 記念艦「三笠」を中心に
Sub Title	The history of vanquished : analysis of the changing perception of post Russo-Japanese War experience
Author	塚田, 修一(Tsukada, Shuichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.69 (2010.) ,p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000069-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日露戦争の記憶の“敗戦後”史

――横須賀・記念艦「三笠」を中心に――

The History of Vanquished

—Analysis of the Changing Perception of Post Russo-Japanese War Experience—

塚　田　修　一*

Shuichi Tsukada

This paper aims to grasp the memory of Russo-Japanese War using the approach of Historical Sociology. In this paper, analytical focus is set on the monumental ship Mikasa; witch is at anchor in Yokosuka City, although it is may be modest. The goal of the analysis is to investigate the relationship of Mikasa and peoples social consciousness from 1945 to 1970s.

In 1945, Mikasa has destroyed by the occupation forces and it fell into ruin. But in the late 1950s, People (Japanese?) had begun to nostalgically recount the memory which relates to Mikasa and of Russo-Japanese War as “glorious past”. What underlies there is the social perception; which can be described as “harsh present time” created by the aching memories of American occupation and the Pacific War. However, in 1960s, the ‘scar’ in Japanese social consciousness began to heal rapidly. Therefore, in 1970s the memories of Mikasa and Russo-Japanese war simply became the objects of consumption.

1.　はじめに

本稿の目的は，日露戦争の「記憶」の“敗戦後”史，すなわち1945年から1970年代までを歴史社会学的に把握することである。本稿では，この「記憶」という術語を「過去を認識しようとするあらゆる営み，そしてその結果得られた過去の認識のあり方」（小関1998: 7）と定義して用いるが，他でもないこの「記憶」論として歴史記述を行うことによって，「過去の出来事そのもの」ではなく，「過去をめぐる社会的営み」を動態的に描出できると考えている。

周知のように，1995年に『現代思想』誌が「戦争の記憶」を特集した（1995年1月号）のを一つの起点として，現在に至るまで，「戦争の記憶」に関する人文社会学的な研究が蓄積されてきた。だが，そこで言う「戦争」とは，すなわちアジア・太平洋戦争のことであり，20世紀日本が経験したもう一つの総力戦である日露戦争については，「戦争の記憶研究」においては言わば“忘却”されてきた。また，

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

主として歴史学者によってなされてきている「日露戦争研究」のほうに目を転じてみても，それらは日露戦争に関する（戦争当時の）歴史的事実――つまり，過去そのもの――を，史料（ドキュメント）に基づき詳述するものがほとんどである[1)]。したがって，日露戦争という過去と社会とが取り結ぶ関係の諸相を描き出すことを試みる本稿は，これら「戦争の記憶研究」および「日露戦争研究」双方の欠を補う場所に位置している。

さて，本稿では，横須賀の記念艦「三笠」に照準を合わせて記述を進める。次節で詳述するように，「三笠」は日本海海戦時に日本の連合艦隊の旗艦として活躍した軍艦であり，それゆえに，日本海海戦，ひいては日露戦争を象徴する存在である。そしてこの記念艦「三笠」は，何よりも日露戦争の「記憶の場」として捉えることが出来るだろう。P・ノラによれば，「記憶の場」とは「人間の意志もしくは時間の作用によって，なんらかの社会的共同体のメモリアルな遺産を象徴する要素となったもの」（Nora 1996=2002: 18–19）であり，「現在における過去を管理するもの」（Nora 1984=2002: 50–51）である。また，記念艦「三笠」は現在も現役で稼動している。よってそれは現在に至るまでの長いスパンで日露戦争の記憶を辿ること――言い換えれば，“定点観測”――を可能にしてくれるものである。この，日露戦争の「記憶の場」である記念艦「三笠」をめぐる人々の営みを追尾することで，日露戦争の記憶の敗戦後の軌跡を辿ることにしよう[2)]。それはまた，これまでの「戦争の記憶研究」が少なからず陥ってきた隘路――「国民国家」や「ナショナリズム」というマクロな説明変数（あるいは“マジック・ワード”）に短絡的に接続させる物言い――を避けつつ，具体的な社会（の営み）を記述する試みでもある。

2. 「三笠」小史

ここで，記念艦「三笠」の来歴を記しておこう。「三笠」は1900年にイギリスのピッカース・ソンズ・アンド・マキシム会社によって建造された，日本海軍の戦艦である。その名を一躍有名にしたのは日本海海戦での活躍である。この海戦において「三笠」は旗艦として戦闘に従事し，東郷平八郎がその艦上で指揮を執った。戦闘開始直後の奇策――結果的に，それが勝敗を決したとされる――“東郷ターン”はあまりにも有名である。東郷が「三笠」艦上で指揮を執るその場面は，後に東城鉦太郎による絵画「三笠艦橋の東郷大将以下」（1907年）によって，より具体的な視覚的イメージを伴って記憶されることになる。しかしながら，この戦艦「三笠」は，1905年の九月に，火薬庫の火災により佐世保港内に爆沈し，その後，引き上げられて修理されるも，ワシントン軍縮会議（1921～1922年）において廃艦が決定する。だが，この「三笠」を記念艦として保存しようという声が高まり，1925年にはその保存が正式に閣議決定，翌1926年に保存工事は完了し，かくして「三笠」は戦艦（Battle Ship）から記念艦（Memorial Ship）へと呼称・用途を変え，横須賀・白浜海岸に鎮座することとなる。

その記念艦「三笠」の艦内には，日露戦争にまつわる品々が陳列・一般公開され，1929年度には約20万人の見学者を集めたという。これは同じ年度の東京帝室博物館の入館者に匹敵し，当時の『博物館研究 Museum Studies』という雑誌は，「本邦のアウトドアミュージアムとして最も成功したもの一であらう」と高く評価していた（木下2002a: 196–197）。

その艦内の展示の様子をもう少し詳しく見てみよう。「艦内には伏見宮博恭王殿下御負傷の記念砲塔，敵巨弾命中の大檣，東郷司令長官の身辺近くを冒した弾孔，敵弾命中に砲員が全滅を遂げた十五糎記念砲廓，東郷司令長官奮戦の最上艦橋，千歳不朽のZ信号旗，激戦中甲板上の血糊を洗った水桶，黄海，日本海両海戦の弾痕図，黄海，日本海両海戦のパノラマ，伏見宮博恭王殿下の記念室，日露戦役記

念品室等をはじめ，砲弾炸裂の個所，破壊の範囲，名誉の戦死を遂げた将卒の氏名及びその個所等をも指示し，激戦当時の悲壮なる光景をまのあたり彷彿せしめるものがあった」（木下2002b: 122–123より引用）。

すなわち，記念艦「三笠」は，日露戦争の「記憶の場」であると同時に，紛れもない「戦争博物館」でもあったのである。そして日露戦争の記憶が目下の総力戦のために動員されていく1930年代半ば～40年代において，記念艦「三笠」が重要なプロパガンダ装置として機能したことは想像に難くない。実際，脚本家の山内久（1925年生まれ）は，「われわれは小学校の三年か四年になると，この白浜の記念艦に連れていかれて，東郷さんはいかに偉かったか，日本海軍の錬度がいかに高かったか，等等を懇々と聞かされる訳です。これは「十五年戦争」への準備教育としては実に有効だったんじゃないかなア」（『シナリオ』2003年3月号：52）と回想している。

また1930年に，「三笠」は『海と空の博覧会』の会場として賑わい，軍港・横須賀の観光の目玉ともなっていく。こうして，記念艦「三笠」は，日本海軍の誇る最大の軍港都市であった横須賀のシンボルともなっていくのである。

だが，1945年の敗戦によって，軍国主義の遺産と見なされたあらゆるモニュメント――もちろん，日露戦争の「記憶の場」も含む――は，国内から姿を消す。この記念艦「三笠」も例外ではなく，アメリカ海軍によって実質的に接収されてしまう。そして「三笠」は一時は解体・スクラップの危機にまで瀕することになるが[3]，その後，横須賀市長の，「三笠」をいわば戦争博物館から海洋博物館に変えて保存を図るという提案を受け，アメリカ海軍は，「艦橋，煙突，檣，砲塔は1948年4月1日までに撤去すること」という条件を付けて「三笠」の転用を許可した。ちょうどその頃の「三笠」の姿を，1948年4月7日号の『アサヒグラフ』誌上に見ることができる。

結果からいうと，ここからさらに「三笠」の荒廃が進むことになる。管理は湘南振興株式会社が請け負い，砲塔の跡に水族館が建設され，「みかさ園」として1949年4月にオープンする。さらに同社は，甲板上にダンスホールを建設・営業し，その一方で，1950年に勃発した朝鮮戦争で屑鉄が暴騰すると，撤去保管されていた艦橋，煙突，檣，砲塔を売り飛ばしてしまうのであった（木下2002c: 49–55）。『サンデー毎日』1953年6月7日号の記事では，「国電横須賀駅からバスで約十分，横須賀市稲岡町白浜の海岸に約四千坪の児童遊園地がある。埋め立てた左はコンクリートの塀，飛行塔が初夏の潮風をうけて忙しく回る。豆汽車の走る音，スクーターの音，木馬は鈴なりの子供を乗せ，ブランコに乗っている子供のほおは，リンゴの色のよう。ローラースケート場では四，五名の学生が，右に左に走り回っている。中甲板には海洋標本室，上甲板には水族館が作られた。煙突の跡は，緑の屋根の大きなホールになってしまった。そして，集会や演劇，音楽会，または卓球などのために“解放”され，毎週金，土，日の三日の夜は，ダンスパーティが行われている。先輩の尊き血と汗でぬらしたであろうそのデッキの上で，家族連れの，あるいは若き男女の楽しげな，ささやきが聞えるのも時代の変転というべきであろうか」と，「みかさ園」の様子を伝えている。だが，このように，当初はそれなりに賑わっていた「みかさ園」であるが，長くは続かず，荒廃の一途をたどる。

ダンスホールになっていた，と述べたが，ここには注釈が必要だろう。永井良和によれば，終戦直後のダンスホールはキャバレーと同一視され，社交ダンスを楽しむ社交の場ではなく，アルコールが供給され，ピンクサービスが行われるいかがわしい場所であったという（永井1991：第6章）。このダンスホール「三笠」も，健全な社交ダンスを楽しむ場というよりはむしろ，その“いかがわしい”ダンス

ホール（＝キャバレー）に近かったようである。「かつて祖国の荒廃をかけて戦った勇士の血で洗われた甲板は，目のふちを青くそめた女と，その相手の夜の密会場」（「新潮雑壇」『新潮』1958年10月号：17）となってしまっていたのである。さらに1956年1月1日号の『週刊サンケイ』に掲載された「“桃色基地”の子供たち」と題する記事は，このダンスホール「三笠」が，少年少女の“桃色遊戯”の温床となっていることを伝えている。同様に，『週刊東京』1956年12月1日号の「性に目覚める“基地の子”ら―横須賀桃色少年団事件―」という記事には，「多少の金をもつ者は，卓球場，ホール，お好み焼屋などをたまり場の第一段階としている。その一つが三笠グループ。かつての軍艦三笠は，いまはスクラップとして処分され，残された船腹は市が大蔵省から委託管理しているが，この三月まで土，日曜には艦内改装のダンス・ホールが開かれていた。目に余る醜状に，ついにホールは閉鎖されたが，現在まん延している推定五百人といわれる桃色グループは，ほとんどこの三笠艦ホールで育ったもの。その連中は，いま中央駅前のモリ・ホールに河岸をかえたようだ」と書かれている。

この時期の「三笠」について，先ほどの山内久はこう語っている。

> 「ある日，ブラリと横須賀へ出かけました。東京を焼け出されて逗子に住んでいたから，行こうと思えばすぐ行ける訳ですが，その日までその気にならなかった。三笠がキャバレーや水族館に変身して失敗したという新聞記事は読んでいたんですが，目をつむれば浮かんでくるのは小学校時代に見た姿ですよね。幼な馴染みに会うような気持でたずねて行った。ところが無い。軍艦三笠がない。屑鉄にでもされたのか。いや，そんなことがあれば新聞，テレビにだって出る筈だ。草茫々の空地をさんざん走り廻って，立ち止まった所が三笠の側だった。気がつかなかった。上部構造を全部剥ぎ取られて土砂塵芥に埋もれていた。壊れた扉からもぐりこんで見ると，中はなおひどい。女性の下着，酒壜，紙，人糞。司令官室の壁いっぱいに赤い塗料で男女の生殖器が描かれていた。当然のことながら小学校の頃とは思考のベクトルは逆を向いている筈なのに，そんなことは関係なく，カッと体じゅうが熱くなった。政治の下劣さ，デタラメさを全身で感じましたネ」（前掲『シナリオ』2003年3月号：52，下線部引用者）

3.　召喚される日露戦争

さて，こうして，いまや荒廃し“桃色少年少女”たちのたまり場と化してしまった「三笠」を復元しようという動きが出てくるのが1950年代後半である。

この「三笠」の復元に関する，具体的な言説を追って見ていくと[4]，そこには二人の旗振り役が居たことに気がつく。伊藤正徳と小泉信三である。

先ず口火を切ったのは，海軍記者としての長い経歴を持つ軍事評論家であり，その著作『連合艦隊の最後』（1956年・文藝春秋）や『帝国陸軍の最後1～5』（1959～61年・文藝春秋）がベストセラーにもなった伊藤正徳である[5]。『文藝春秋』1957年8月号に，「國敗れて……記念艦三笠の現状」と題するグラビアと，伊藤による「「三笠」の偉大と悲惨―国破れて記念艦朽つ―」と題する記事が掲載され，その記事の中で伊藤は，日本海海戦における日本の勝利を，野球のパーフェクト・ゲームになぞらえて，その「歴史的偉業」を語り，敗戦までは，記念艦「三笠」を観る人々は，「そこに祖国の名誉を感じ，民族の誇りを呼吸し，日本を救った偉大なる先人に対する尊敬の念を新たにして，静かに自らの義務に

醒めたことであろう」，すなわち，「三笠は日本の魂として存在した」と述べる。しかし，敗戦後の現在の荒廃した三笠は，「敗戦日本の縮図が，今日そのまま残ってい」て，外国人達の眼にも，「ただ日本が，このような先祖の偉業を忘れ，その祀りを怠り，国防の歴史に対して無関心となり，独立国民の魂が抜けた一つの証拠として目撃されるのみである」と述べる。

この伊藤の文章への反響は大きかったようで，国内外から記念艦「三笠」を復元しようとの声が高まる。1958年には，敗戦・接収と同時に解散していた，「三笠」保存の援助団体である三笠保存会が再建され，記念艦三笠復元募金を開始する。

そして，ここでもう一人の旗振り役が登場する。先の伊藤正徳と親しい間柄だった[6]，元慶應義塾塾長・小泉信三（1888年生まれ）である。表紙に「盗まれた軍艦が元に戻る　旗艦“三笠”の大快事」の見出しが躍る『日本週報』1958年11月25日号に，小泉は，「三笠保存と自重の精神」と題する記事を寄せている。そこで小泉は，「まことにやむを得ない次第でありましたが，日本国民の自重の精神は，敗戦によってくずれました。他国の武力に屈するのやむなきに至りました日本人が，その国民としての誇りを失い，心のささえを失って，頽廃に陥ったことは，ごらんの通りでございます。［中略］“三笠”の現状は，端的に，この自尊心を失った国民の，精神状態を示すものと思います。自尊，自重の精神を失った国民は，日本国民として，忘れてはならない“三笠”を，現在のような状態に，陥るままに陥らせ，また，国民にとって，これほど尊い記念物である“三笠”が，現在のような状態に，放置されるという事実そのものが，さらにまた原因となって，人心をいっそうの頽廃に導くということになって，現在に至ったのであります」，そして「“三笠”がどういう現状にあるのか，ということに思いおよびますと，私どもは，実に耐えがたい気持がするのであります。日本人として赤面するのみならず，日本を愛する外国人が赤面するであろう，ということでまた赤面する」と述べる。

以上の，伊藤・小泉の主張をまとめると，彼らは，「日本民族の独立精神」（伊藤），あるいは「日本国民の自重の精神」（小泉）が敗戦によって失われてしまった現状を，荒廃した「三笠」の現状に重ね合わせ，それを取り戻さん，すなわち「三笠」を復元せん，と主張しているのである。

さて，こうした動きと同時期の1957年に，映画『明治天皇と日露大戦争』（大東映）が大ヒットする。この，時代錯誤とも思える映画の大ヒットは知識人たち，並びに映画業界関係者を驚かせたようで，『キネマ旬報』誌（「『明治天皇と日露大戦争』における観客反應」『キネマ旬報』1957年6月上旬号：113–117），そして南博の主催する社会心理学研究所（南博「『明治天皇と日露大戦争』の観客」『週刊朝日』1957年5月12日号：76–79）が，その大ヒットの要因を探るべく，観客への調査を行っている。

『キネマ旬報』の調査から見ていこう。まず観客構成であるが，高年齢層の観客が多い。そして，観覧の動機は，高年齢層では「明治時代という素朴感に憧れた」というものが，弱年齢層では「ただの娯楽映画として観た」というものが多い。また，映画を観終わった後の感想は，「感激した」「良かった」というものが全体の50～60パーセントを占め，その中でも最も多い感想が，「昔の日本の素晴らしさを物語っていて立派だ」というものである。そして，最も感動した場面は，「乃木将軍と息子が会見する場面」や，「明治天皇が堀の外で二人の近衛兵に声をかける場面」となっている。

南博の調査も大同小異である。すなわち，40歳以上の観客が多く，その観覧動機は，中年以上の層では，「国民が心を合わせて祖国のために尽していたころが懐かしくて」といったタイプの答がほとんどを占めている。すなわち，「中年以上の人たちにとっては，自分たちが直接に明治の空気を吸ったことのあるなしにかかわらず，旅順攻略，日本海海戦に代表されるような明治という時代，日本の“古き

よき時代”の再現こそが大きな魅力なのであり，これがこの映画の観客動員に一番大きな役割を果たしたということがいえる」のである。観覧後の感想も，「非常に感激した」という人が全体の約2割，「よかった」という人が6割強となっている。また，印象に残った場面としては，「開戦するかどうかをきめる御前会議」との答えが一番多く，その場面については，「天皇が最後まで国民の生活ということを考えられているのに感激した」といった感想がほとんどであった。

以上の調査から指摘できるのは，この映画の大ヒットの要因は，日露戦争に代表される明治という時代――それは，明治天皇と国民，また乃木親子の関係のように日本の古い家族制度にみられる“美徳”があった時代――への郷愁，すなわち日露戦争＝明治へのノスタルジアであったということである[7)]。

4.「悪い現在」――先の戦争の傷跡

1950年代後半，ほぼ同時期に起こった，「三笠」復元と，日露戦争＝明治へのノスタルジアという，あたかも日露戦争の記憶の召喚を思わせる二つの動き。しかし，考えてみると，これは奇妙でもある。見田宗介が言うように，この時代は，人々が理想に生き，それが未来に必ず現実となることを疑わなかった「理想の時代」であるとするならば（見田1995），人々の心情のベクトルは，明治や日露戦争といった過去ではなく未来を強く指していたのではなかったか。では，なぜ，日露戦争という過去が召喚されなければならなかったのであろうか。

あるいは，ここでこう問いを立てよう。「この時期の人々を，日露戦争（の時代）へのノスタルジアへと駆り立てたものは何か？」と。

F・デーヴィスによれば，ノスタルジアとは，「現在もしくは差し迫った状況に対するなんらかの否定的な感情を背景にして，生きられた過去を肯定的な響きでもって呼び起こすこと」（Davis 1979=1990: 27）である。つまり，端的に言えば，「悪い現在ゆえの良い過去」という関係がそこには存在するということである。また，「ノスタルジアは，時代の混乱の中でひどく傷つけられたアイデンティティにしがみつき，それを再確認する手段」（Davis 1979=1990: 153）である。そう考えるならば，映画『明治天皇と日露大戦争』の観客に，日露戦争という「良い過去」へのノスタルジアを生じせしめた「悪い現在」，あるいは，集団のアイデンティティをひどく傷つける「時代の混乱」という状況が，この1950年代後半に存在していたはずである。

また同様に，「記憶の場とは，根底から変容し革新されつつある共同体が，技巧と意志をもって，生み出し，作り上げ，宣言し，また維持するものである」（Nora 1984=2002: 37）とするならば，日露戦争の「記憶の場」である「三笠」を復元しようとする運動の背景には，「共同体が，根底から変容し革新されつつある現状」が存在しているはずである。

本稿では，そうした「悪い現在（現状）」とは，“先の戦争の傷跡”であるという説明を与える。それについて示唆を与えてくれるのが，小熊英二の『〈民主〉と〈愛国〉』である。戦争体験を光源として，戦後思想史を照らし出したこの大著において小熊は，敗戦に直面した人々が，「昭和」を批判する準拠点として「明治」を想起し，それを理想化していったことを指摘している[8)]。丸山眞男もその一人である。例えば，丸山は1946年10月の講演「明治国家の思想」で，「われわれは日露戦争の時代はよく知りませんから，昔の人に聞くと，非常に国民的に張り切っていて，今度の戦争のようなものではなくて，下から湧き起った力でやったというふうに聞かされております」と述べているが，ここでの「明治」は，「敗戦をもたらした「昭和」の国家を批判しながら，ナショナル・アイデンティティを保つための

拠り所だった」（小熊2002: 120）のである。

そして私たちは，すでに先の伊藤・小泉の語りの中に，こうした“先の戦争の傷跡”，いや正確に言えば“敗戦の傷跡”を目撃している。繰り返しになるが，伊藤・小泉は，「日本民族の独立精神」，あるいは「日本国民の自重の精神」が敗戦によって失われてしまった現状を嘆き，その現状を荒廃した「三笠」に重ねていた。そのような“敗戦の傷跡”が疼く「悪い現状」があるからこそ，「良い過去」の姿である以前の姿へと「三笠」は復元されねばならなかったのである。

確かに，1956年の『経済白書』は，「もはや戦後ではない」と謳っていた。しかしながら，先の戦争は，恐怖やコンプレックスという形をとって，人々に大きな傷跡を残していた。例えば，1950年代の『ゴジラ』をはじめとする特撮映画には，明らかに原（水）爆への恐怖，あるいは空襲体験への恐怖が描かれていたし，1956年に連載が開始された横山光輝『鉄人28号』（月刊『少年』連載）には，先の戦争が暗い影を落としており，「兵器」に対する忌避――主人公の少年は，自分が操縦する「鉄人」が，「兵器」なのだろうかと逡巡する――も，はっきり見て取れる。

また，ベストセラーを眺めてみると，敗戦後10年ぐらいは，日本を否定する論調のものが圧倒的多数を占めていた（辻村1981）。だからこそ，雑誌『丸』の1957年3月号の編集後記は，こう述べなければならなかった。「今月号は，御覧の通り「日本・海・空軍勝利の記録」特集とした。戦後ややもすれば劣等感にとらわれがちの私たちではあるが，あの世界の大国を向うにまわして戦つてきた私たちの戦史は部分的にはかならずしも敗けてばかりいたのではない。時に胸のすくような快勝の記録がなかつたわけではない。この事実があることを私たちは一時でも忘れてはいけないと思う」（吉田1995=2005: 95–96より引用）。

そのような，いまだ疼く“先の戦争の傷跡”という「悪い現在」があったからこそ，「良い過去」＝「日露戦争」（あるいは「明治」）がノスタルジアの対象として召喚されたのである。評論家の荒正人は――当時，この『明治天皇と日露大戦争』について語った幾多の知識人のうちで，恐らくただ一人だけ――この映画が国民に迎えられたのは，今度の戦争というものが国民のすべてにとって大なり小なり傷跡を持たせており，それにつながりをもたせたからだ，と指摘していたが[9]，それは正しかったのである。

5. 露出する敗戦の傷跡――横須賀

実際，「三笠」が鎮座する横須賀という都市空間は，この“先の戦争の傷跡”，もっと精確に言えば“敗戦・被占領という「悪い現在（現実）」”を，顕在化させる環境であった。ここで，「三笠」を取り巻く都市空間・横須賀を素描しておくのは無駄ではないだろう。

1949年に横須賀市汐入町巡査派出所に配置された，とある警察官は，こう回想している。

> 「汐入は，かつて海軍工廠の工員さんの住宅地として静かな街であったが，谷戸沿いに形成された特殊性と基地に近いと言うことから米兵相手の売春宿が次々と出来て全国から集まってきた売春婦と，これをとりまくポン引きが，一般民家に巣を作り，昼夜の別なく，進駐軍の兵士を求めて往来し，風紀の乱れは言語に絶するものがあった。例えば，一般民家の四畳半位の間を，カーテンで仕切って二部屋にして使用し売春するとか，幼児が銭湯で性病をうつされた等，現実のものとは思えぬ浅ましさで，パンと煙草等を求める子供達の姿にも食わんが為の生活がここまで落ちたかと情

けなく思えた。米軍艦も，出入りが頻繁で，これを迎えるため，汐入本町地区の一部では，日本建築を洋風に模様替えして，英語の看板がどぎつく掲げられ，夜ともなれば，青や赤のネオンが霧の中にまばたきこのネオンの流れの中を，色鮮やかな原色のチャイナドレス等の洋装が横行し，片言の英語がざわめく中をバイヤーや，ドル買いが右往左往し，基地横須賀の縮図を目のあたりにみる思いであった。取り締まりも米兵と警察官が一緒になってジープでパトロールし，少しの違反でも取り締まった。進駐軍兵士の中に性病が増えてきたことから，警察と軍が一体となって，街頭で客を拾うポン引きと売春婦の取り締まりを強化し，米兵に性病をうつした売春婦は，感染させられた米兵の指名によってMPから警察に引き渡され，米ヶ原共済病院八病舎に強制収容したが，一週間の検診治療期間中，警察官は収容したこれら売春婦の逃走防止のための勤務にも当たらなければならなかった」[10]。

このような「悪い現実」は，1952年のサンフランシスコ講和条約発効による占領終了後も，横須賀の米軍基地周辺の人びとにとって重苦しく，のしかかっていた。

だが，問題は更に複雑である。こうした横須賀の基地周辺の人々が直面していたのは，風紀・風俗面の悪化・悪影響――その象徴的存在としての「パンパン」（米兵相手の売春婦）と米兵――という現状だけではない。彼らが直面していたのは，そうした“諸悪の根源”たる「パンパン」や米兵に，経済的に寄生している，せざるを得ないという現実であった。実際，神崎清による報告によれば，アメリカ海軍兵士の給与のうち，1ヶ月に5億円が横須賀で消費されるとし，その内訳を以下のように示している（神崎1953）。（一）パンパン・ハウス業者：約1億5千万円（二）キャバレー・ビヤホール・レストラン：約1億5千万円（三）スーベニア・ショップ：約1億円（四）タクシー・リンタク：約5千万円（五）その他の商店：約5千万円。この1ヶ月に5億円という数字は，横須賀市の財政が年間7億円（1951年度）であったことを考えると，莫大な金額である。これだけの大金が，「パンパン」や，その他米兵相手の商売を通して横須賀に流れ込んできていたのである。

慶應義塾大学社会事業研究会による横須賀の社会調査報告[11]によると，「問題は横須賀市の特殊形態即ち消費都市で何ら生産的施設を持たず，戦前に於ては日本海軍相手にその市経済を成立たせ，戦後は外国海軍にに依存するといふ都市形態である。それ故市民が生活を維持する為にはそれらに依存する職業が盛になる事は当然であり，スーベニヤの存在もその一つである。最も問題となるのは所謂ハウスである。このハウスが横須賀市内には約1300軒あるといはれ，これにより市民が生活をし，自ずと市経済もこれに依存して行く」という。すなわち，市の経済自体が，米兵相手の商売に寄生せざるをえない状況であったということである。

6.　ノスタルジアの崩壊

さて，「三笠」復元の話に戻ろう。伊藤や小泉の運動は実を結び，三笠保存会の趣旨に賛同する内外多数の人々（約50万人）から多額の浄財が寄せられる。そして「三笠」は，1959年には防衛庁の所管となって復元工事が着工され，1961年には工事が完了，同年の5月27日に，復元記念式が行われる運びに至った[12]。

伊藤正徳は，「[一九六一年] 五月二十七日，私は，三笠が横須賀港の岸壁に聳えているのを見て軽い身慄いを感じた。「軍艦三笠」を見るのは之が初めてであり，それまでは，そこに「映画館三笠」[13]が

横わっているのを見たに過ぎなかったからである。また，身慄いを感じたのは，少しく誇張して言えば，十六年振りで独立国日本に接したという感慨の故かも知れない」（「続・三笠の偉大と悲惨」『文藝春秋』1961年8月号：240，下線部引用者）と，この日のことを語る。

だが，1960年代を通して，ここまで見てきたような関係――すなわち，“先の戦争の傷跡”という「悪い現在」ゆえに，「良い過去」である日露戦争や明治，そして「三笠」復元がノスタルジックに希求されるという関係――は，変容・崩壊していくことになる。いや，その崩壊は，1961年の時点ですでに始まっていたのかもしれない。復元記念式当日の1961年5月27日の新聞報道は，「リバイバル三笠まつり」と題して，こう伝えている。

> 「きょう二十七日は，むかしの海軍記念日――。横須賀市では記念艦「三笠」の復元式を織りこんで「三笠祭り」をくりひろげる。復元式には旧海軍軍人で結成している水交会などの会員六百人が海上自衛隊の警備艦に乗り，大いにリバイバル気分を味わう。これを当てこんだ商店街は“三笠大売出し”と銘打ち，なかでも中心街の三笠共同ビル商店街は「三笠」の大きさと，同ビルの長さを当てるクイズを出し，市民の人気を集めている。このほか“ミス三笠コンテスト”三笠ゆかたの民踊行列と盛りだくさん。」（『毎日新聞』1961年5月27日）

こうした「リバイバル気分」で，「ミス三笠コンテスト」や「民踊行列」に興じる人々と，復元された「三笠」の姿に「十六年振りで独立国日本に接したという感慨」で「身慄いを感じ」ている伊藤正徳との滑稽にも見える温度差に注目しておかなければならない。この温度差は，恐らくは，「三笠」をめぐる，そして日露戦争という過去をめぐる営みの変容の序曲でもあったのだ。

まず1960年代前半に起こったのは，ちばてつや『紫電改のタカ』（1963年～『週刊少年マガジン』連載）や辻なおき『0戦はやと』（1963年～『週刊少年キング』連載）などの，戦記マンガブームである。そこで確認しておきたいのは，「戦記マンガ」や，少年漫画誌に掲載された「兵器特集記事」を，何のアレルギーも持たずに，無邪気に受容することが出来た「戦争を知らない子供たち」の台頭である。

また高橋三郎によれば，昭和40年代，すなわち1965～1974年に出版された「戦記もの」から，それまでの「戦記もの」には存在していたある種の「凄み」――すなわち，筆者が個人としてその過酷な体験を語る中から，読者が感じ取っていたもの――が失われていくという（高橋三郎1988: 76）。さらに，好井裕明は，1960年代の特撮映画において，ファンタジー化，あるいは脱色されたリアルとしての原水爆イメージが，淡々と消費されていくようになるという事態を指摘している（好井2007）。

こうして1960年代，先の戦争の記憶が，急速に“脱臭”され，“先の戦争の傷跡”も急速に癒えていく――事実，1970年代を迎える頃の横須賀では米兵やパンパンの姿は後景化しつつあった[14)]。そしてこの“脱臭”および“治癒”と平行して進んでいたのが，日本人の「自信の回復」，そして「現在の肯定」である。

高度経済成長――1960年～65年の平均成長率は9.7パーセント，1965年から40年までは11.6パーセントという驚異的な伸びを示していた――の中，日本は1963年にOECD（経済協力開発機構）に加盟し，国際的にも先進国の一員となる。さらに翌1964年に開催された東京オリンピックは人々に自信をもたらした。実際，世論調査において，「日本人と西洋人の優劣」という質問に対し，1951年には「日本人が優れている」は28パーセント，「劣っている」が47パーセントであったものが，1963年には逆

転し，「優れている」が33パーセント，「劣っている」が14パーセントとなる。さらに1967年には「優れている」が47パーセントにまで上昇する[15)]。こうした変容に呼応して，1960年代のベストセラーには，日本の美点を再確認し，日本および日本人を肯定していく内容のものが多くなっていく（辻村，1981: 257）。

また見田宗介は，1963年に行われた社会意識調査の結果を分析しているが，その調査で実施された質問は，以下のものであった（見田1965: 125–139）。

> 次の時代のなかで，あなたが一番いい時代だと思うのは，どの時代ですか。一つだけえらんでください。（1）明治時代（2）大正時代（3）昭和の初め（4）戦争中（5）終戦直後（6）現在

この質問に対し，実に国民の55.6パーセントの人が，「現在」を一番いい時代だと答えている。あらゆる世代，あらゆる地域，あらゆる学歴，あらゆる職業の人々が，近代史の六つの時代の中で，1963年現在を「最もよき時代」とするのである。それに対し，「明治」が一番いい時代だと答えた人は，わずか5.6パーセントに過ぎない。この「現在」の強い肯定は，同時に，もはや，「明治」が「良い過去」として見出されなくなってしまっており，またノスタルジアの対象でもなくなってしまっていることを示す。

こうした1960年代の変容を経て，記念艦「三笠」，および日露戦争をめぐる営みも変容していく。1971年5月13日の『神奈川新聞』は，「モテています明治ムード」と題して，「日本海海戦の旗艦として知られる横須賀市稲岡町の記念艦「三笠」に最近ぐんと見学者がふえている。老人クラブなどお年寄り層をはじめ旧軍人のほか，修学旅行の小学生，若いアベックもふえて日曜日など艦橋は鈴なり。［中略］おとな一五〇円の入場料を払った見学者たちは三十分ものの“日本海海戦”映画や海戦のパノラマ，各種の資料を見て回るが，古い水兵服の陳列や係員の勝ちいくさ説明に「カッコいい」を連発して帰るという」と伝えている。

ここで記念艦「三笠」に見出されているのは，かつて伊藤正徳や小泉信三が見出していたような，「日本民族の独立精神」や「日本国民の自重の精神」といったものでは，もはやなくなっている。ここでは，「三笠」は，ただ「カッコいい」ものとして“消費”されてしまっているのである。

1969年には映画『日本海大海戦』（東宝）が公開されているが，その豪華なキャスティング（三船敏郎，加山雄三，仲代達矢，草笛光子，松本幸四郎）にもかかわらず，不振に終わる。映画評論家の佐藤忠男は，この映画の批評において，「時代錯誤な映画である。面白くない」（『キネマ旬報』1969年9月上旬号：70–71）と一蹴している。だが，この映画の不振は，作品自体の出来不出来のみに帰するべきではないように思われる。この不振は，人々が，もはや日露戦争や日本海海戦に，ノスタルジア，あるいは何らかのアクチュアリティを見出せなくなったことの証左でもあるのではないか。佐藤忠男は，同じ文章の中で，この映画の見所として，「海戦の場面の特殊撮影」，すなわち「軍艦の模型がわりあいよく作られているとか，それが吐き出す煙，その砲弾が着水してたちのぼる水柱などが，明治神宮外苑の記念館に保存されている日露戦争名画にかなり良く似ているという点」を辛うじて挙げている。つまり，人々がこの映画に（辛うじて）見出すであろう魅力は，上記の「カッコいい」に相通ずるような，「海戦の特撮場面」でしかないのである。

7. おわりに――過去という名の，生ける死者

私たちが記念艦「三笠」に照準を合わせて辿ってきた，日露戦争の記憶の“敗戦後”史をまとめよう。

敗戦によって息の根が止められたかに見えた日露戦争の記憶は，1950年代後半，唐突に息を吹き返す。それは何より，“先の戦争の傷跡”が疼く「悪い現在（現実）」ゆえに，「良い過去」として，ノスタルジックに日露戦争が希求されていたのであった。だが，1960年代に急速に進んだ，“先の戦争の傷跡”の“治癒”，それと並行して進行した日本人の「自信の回復」・「現在の肯定」により，そうしたノスタルジックな関係性は崩壊し，1970年代には，日露戦争の記憶は，もはや何のアクチュアリティもたない，“消費”の対象となってしまうのである。

安田武は1959年に，先の戦争体験の風化を危惧する文脈で，こう書いていた。「日清・日露の戦争体験は，敗戦の日までの日本民族全体を支配し，立派に生きつづけ，ぼくらの仲間の多くはそこで死んでいった。日清・日露の体験は生き，太平洋戦争の体験は，なぜ死滅しそうになっているのか。おしゃべりや告白がハンランしすぎたためであるか」（安田1963: 93，傍点引用者）。ここでは恐らく，日露戦争という過去が，敗戦の日でもって死んでしまったことを前提とされている。しかしながら，本稿で観察してきたのは，日露戦争という過去が，敗戦の日でもって死んでしまうわけではなく，むしろ，先の戦争体験と作用し合いつつ，生き死にを繰り返していく――いわば，生ける死者・ゾンビのような――姿であったのではないか。

さて，21世紀現在の日本社会において，2004年の日露戦争百周年記念の各種催しや司馬遼太郎『坂の上の雲』の大河ドラマ化等，この日露戦争という“生ける死者”がどうやら甦りの兆しを見せているようである。その共時的分析，あるいは浜日出夫の表現を借りれば「歴史の社会学」――「人びとが過去に起こった出来事を現在どのようにとらえているのか，またそれに基づいて現在どのように行動しているのかを明らかにしようとする」（浜2008: 182）社会学――による記述は，稿を改めて行うことにしよう。

【付記】本稿は，三田社会学会大会における口頭発表「日露戦争の記憶の“敗戦後”史―横須賀・記念艦「三笠」を中心に―」（2008年7月12日）に基づくものである。

注

1) ただ，近年では小森・成田編2004や日露戦争研究会編2005等，新しい視角からの研究もなされている。
2) なお，本稿同様に，記念艦「三笠」を「記憶のかたち」として論じた研究として，高橋健司2006があるが，その論旨は，本稿とは位相を異にするものである。
3) 1947年7月29日の『神奈川新聞』には，「“東郷さんも苦笑い”『三笠』を臨海ナイトクラブに？」と題する記事が載っており，「敗戦の結果浮びあがるもの，まつ殺されるもの，この二つの運命はあながち人間社会や銅像の世界ばかりではない，その審判の日を静かに待つているものの一つに記念艦三笠がある。横須賀市白浜海岸に大正14年以来コンクリートで固められた三笠は東郷元帥とともに軍国主義の生きたお手本として観覧者の数は日に数千を数えたものである。しかしいまや世界は一転した。［中略］現在同艦は大蔵省所管となつているが某会社ではマスト，煙突を総て取除き臨海ナイト・クラブを作つてはという名案を出すかと思えば，将来この地の利を生かして海洋競技のクラブ・ハウスにしてはという比較的堅実な政策を祕しているなどなかなかに興味が深い。もつとも終戦のどさくさにまぎれて艦内にあつた赤いジユータンや貴重品は誰かが勝手に処分した

というから地下の東郷さんもさぞ苦笑したことであろう」と伝えている。

4) 雑誌記事の検索に際しては，主に『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』を利用した。

5) 吉田裕は，こうした伊藤の一連の著作の特徴的な論点として，「「大日本帝国」の時代のすべてを決して肯定している訳ではないが，「栄光」の連合艦隊への強い共感が，たえず，その時代に対するノスタルジアをよびさましていること」を指摘している（吉田1995=2005: 111–112）。

6) 小泉は後年，こう書いている。「ところで伊藤正徳であるが，私はこの伊藤と興味を共にすることが一番多かったのではなかったかと思う。第一に，彼は世界的の軍事評論家，殊に海軍通であった。私の軍事に関する知識はもとより貧弱であるが，国防の重要性は正当に評価し，また立国の上に於いて国民尚武の精神の大切であることは，充分之を弁えている積りである。否，日本が軍部横暴の悲劇を招いたのも，国民一般に国防の知識が足らず，また，その必要とその限界に対する正当の判断力を欠いたからであると思っているのである。この点に於いて，伊藤と私の説は常に一致した。先年伊藤が文藝春秋の誌上に「三笠の光栄と悲惨」と題する一文を掲げ，記念艦三笠をあの儘にしてはならぬ，と世間に呼びかけたときにも，私は直ちに全面的に賛成し，東京のみならず，大阪，名古屋にも出かけて往って，同趣旨の演説をしたり，また度々文章を書いたりした。伊藤はそれを認めていたと思う。」（小泉1997: 199–200）

7) 坂本多加雄――彼は「新しい歴史教科書をつくる会」の中心的メンバーでもあった――は，この映画について，「いわば，『明治天皇と日露大戦争』は，庶民の歴史的記憶に存在した，君と民が一体として困難を乗り切った，大日本帝国の理想像なんです。［中略］「あるべき理想像」がちゃんと確立している時代というのは，ある意味で幸福な時代なんですね。もちろん，そんな時代が実際に存在したかどうかはともかく，かつてそういう時代があったという「歴史的記憶」は，観る側にとって心地よいものなのです」（坂本2005: 179–181）と述べている。

8) 小熊も述べているように，司馬遼太郎もその一人である。「終戦の放送をきいたあと，なんとおろかな国にうまれたことかとおもった。（むかしは，そうではなかったのではないか）と，おもったりした。むかしというのは，鎌倉のころやら，室町，戦国のころのことである。やがて，ごくあたらしい江戸期や明治時代のことなども考えた。いくら考えても，昭和の軍人たちのように，国家そのものを賭けものにして賭場にほうりこむようなことをやったひとびとがいたようにはおもえなかった。ほどなく復員し，戦後の塵にまみれてすごすうち，思い立って三十代で小説を書いた。当初は，自分自身の娯しみとして書いたものの，そのうち調べ物をして書くようになったのは，右にふれた疑問を自分自身で明かしたかったのである。」（司馬1990=1993: 283–284）

9) 荒正人，1957年，「大衆映画論」『映画芸術』9月号

10) 横須賀警察署史発行委員会，1977年，『横須賀警察署史』: 318–319

11) 慶應義塾大学社会事業研究所，1953年，『街娼と子どもたち―とくに基地横須賀市の現状分析―』

12) 横須賀百年市編纂委員会，1965年，『横須賀百年史』: 309

13) これは恐らくは誤認である。管見の範囲内では，「三笠」が「映画館」になっていた事実は確認できない。

14) なお，横須賀の現実とイメージ表象に関して，論者は学会報告（塚田2008）を行っている。

15) NHK放送世論調査所編，1975年，『図説　戦後世論史』日本放送出版協会

文献一覧

Fred Davis, 1979, *Yearning for Yesterday; A Sociology of Nostalgia*, The Free Press. = 1990，間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳，『ノスタルジアの社会学』世界思想社

浜日出夫，2008,「記憶と歴史」，長谷川公一・藤村正之・浜日出夫・町村敬志，『社会学』有斐閣

神崎清，1953,「基地周辺―ヨコスカにかんする断片的ノート―」『思想』№348，1953年6月

木下直之，2002a,「先の戦争の中の先の戦争の記憶」，『現代思想』第30巻第9号

――――，2002b,「戦争博物館のはじまり」，『岩波講座 近代日本の文化史4 感性の近代』岩波書店

――――，2002c,『世の途中から隠されていること――近代日本の記憶』晶文社

小泉信三，1997年，『ペンは剣よりも強し』恒文社

小森陽一・成田龍一編，2004,『日露戦争スタディーズ』紀伊國屋書店

小関隆，1998,「コメモレイションの文化史のために」，阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち』柏書房

見田宗介，1965，『現代日本の精神構造』弘文堂
————，1995，『現代日本の感覚と思想』講談社学術文庫
永井良和，1991，『社交ダンスと日本人』晶文社
日露戦争研究会編，2005，『日露戦争研究の新視点』成文社
Nora, P., 1984, *Entre Memoire et Histoire, "Les Lieux de Memoire*, Editions Gallimard. = 2002年，「記憶と歴史のはざまに」谷川稔監訳『記憶の場1』岩波書店
——, 1996, *From Lieux de memoire to Realms of Memory, "Realms of Memory,vol. 1*, Columbia University Press.； = 2002年，「『記憶の場』から『記憶の領域』へ」谷川稔監訳『記憶の場1』岩波書店
小熊英二，2002，『〈民主〉と〈愛国〉』新曜社
坂本多加雄，2005，『スクリーンの中の戦争』文春新書
司馬遼太郎，1990 = 1993，『この国のかたち一』文春文庫
高橋健司，2006，「歴史教育における記憶の取り扱いについて（2）―日露戦争の表象を巡って―」『朝日大学教職課程センター研究報告』第14号
高橋三郎，1988，『「戦記もの」を読む――戦争体験と戦後日本社会』アカデミア出版
塚田修一，2008，［学会報告］「〈戦後〉・横須賀の表象分析―YOKOSUKA・ヨコスカ・よこすか―」於第81回日本社会学会大会ポスターセッション
辻村明，1981，『戦後日本の大衆心理――新聞・世論・ベストセラー』東京大学出版会
好井裕明，2007，『ゴジラ・モスラ・原水爆――特撮映画の社会学』せりか書房
安田武，1963，『戦争体験』未来社
吉田裕，1995 = 2005，『日本人の戦争観』岩波現代文庫